

恋する Polyphemus

— Alexander Pope の Ovid 翻訳 —

高 谷 修

はじめに

ギリシア神話の中でも、ガラテア（Galatea）に恋するポリュフェーモス（Polyphemus）の話は多くの芸術家によって取り上げられたテーマであった。例えばル・ロラン（Robert Le Lorrain, 1666-1743）は大理石のガラテア像を物しているし、絵画においてはプーサン（Nicolas Poussin, 1594-1665）やルドン（Odilon Redon, 1840-1916）がこのテーマの作品を残している¹。そして一番有名なのは恐らくはラファエッロ（Sanzio Raffaello, 1483-1520）の「ガラテアの勝利」triomphe de Galatee であろう。また音楽においてもこのテーマは 17 世紀末か

1 佐々木英也編集『全集 美術の中の裸婦』シリーズ第 4 巻『神話・ニンフと妖精』（集英社、1980）参照。本文において言及した画家以外に、ティシュバイン（Johann Heinrich Tischbein, 1722-1789）、やモロー（Gustave Moreau, 1826-1898）またジョルダノ（Luca Giordano, 1634-1705）やアルバーニ（Francesco Albani, 1578-1660）などにもガラテアを題材にした絵画がある。同書 23-30 頁参照。またカラッチ（Annibale Carracci, 1560-1609）にも幾つか作品がある。「週刊グレート・アーティスト、分冊百科・西洋絵画の巨匠たち、59 カラッチ」（同朋社出版、1991）参照。

らイタリアなどにおいて流行の兆しを見せていたようで、ヘンデル（George Friedrich Handel, 1685-1759）はイギリスにやって来る以前のイタリア時代（1708年）に「アチ、ガラテアとポリフェーモ」Aci, Galatea e Polifemo と題するセレナータを書いている²。そして彼はシャンドス公爵（James Brydes, 1st Duke of Chandos, 1673-1744）の館で楽長を務めた 1718 年から 20 年の 3 年間の間に「シャンドス・アンセム」と呼ばれる一連の作品を残したが、その内の一つに「エイシスとガラティア」Acis and Galatea という音楽劇（Masque と呼ばれている）がある³。

ヘンデルのこの作品の基になったものは、ローマの詩人オウィディウス（Publius Ovidius Naso, 43BC-AD18）が『変身物語』*Metamorphoses* の第 13 巻の中で描いた「アーキスとガラテア」の挿話であった。この挿話はガラテアの愛する恋人アーキスがガラテアに横恋慕するポリュフェーモスによって殺される話であり、ガラテア自身によって物語られるものである。この話を基にジョン・ゲイ（John Gay, 1685-1732）、アレクサンダー・ポープ（1688-1744）そしてジョン・ヒューズ（John Hughes, 1677-1720）が共同で台本を作り、それをヘンデルが音楽劇に仕上げたのであった。

ところで、三人の台本作者の一人であるポープは、この時期に既にこの挿話の英訳を残していた⁴。本稿が注目するのはこのポープに拠る英訳である。彼はこの挿話をどのように翻訳したのであろうか、その特質を探ることを目的としたい。特に、ポリュフェーモスはどのように描かれているか、その点を仔細に検討することに焦点を絞りたい。さらに、結論を先取りして言えば、ポープ

2 『最新名曲解説全集 21 声楽曲 1』（音楽之友社、昭和 62 年）417 頁参照。

3 同上書、416-418 頁参照。

4 ポープの「ポリュフェーモスとアーキス」のテキストが出版されたのは、*The London Magazine: or Gentleman's Monthly Intelligencer* の 1749 年 12 月号においてであった。しかし、実際に翻訳がなされたのはポープが 14 歳のころであったとされる。E. Audra and Aubrey Williams, ed., *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*, Vol. 1 (London: Methuen, 1961)、364 頁参照。

のポリュフェーモス像は少なからず原作とは違ったものになっているのだが、それはどのようなポーブの思想に由来するものか、その点も考察のうちに含めたい。そのために基本的にはオウィディウスの原典とポーブの英訳を比較対照しつつ考察するという手順を採ることで、この考察を進めたい。ただ注意しなければならないことは、オウィディウス自身がこの挿話を描くにあたってギリシアのテオクリトス (Theocritus, *fl.* c.270 BC) の牧歌の 11 番から大きな影響を受けていることである。そのため、ポリュフェーモス像の十全な理解の為にはまずテオクリトスにおけるポリュフェーモス像を最初に考察することが必要不可欠であると思われる。よってまず最初にテオクリトスの描くポリュフェーモス像の特徴を考え、その後にオウィディウスに至り、最後にポーブの描くポリュフェーモス像と比較する中で、ポーブ訳の特質を探るという手順を採りたい。このような比較の方法によってポーブの描くポリュフェーモス像の特質を解明することを目指したい。

1 テオクリトスのポリュフェーモス

テオクリトスの「牧歌」の第 11 歌は、「恋を癒す薬はピーエリアのムーサイの他にはない」というテーマを述べることから始まる。第 11 歌の冒頭において、語り手は友達に医者にして詩人のニーキアース Νικήας に次のように語る。Οὐδὲν ποττὸν ἔρωτα πεφύκει φάρμακον ἄλλο, . . . ἢ ταὶ Περίδες⁵ (1, 3) 「恋の薬はありません、……ピーエリアのムーサイの他には。」ピーエリアのムーサイとは、要するに歌ということである。語り手は次に、歌を歌って恋の傷を

5 A.S.F. Gow, ed., *Theocritus, Vol. 1* (Cambridge University Press, 1950) p. 86. 以下テオクリトスからの引用はこの版に拠る。Vol. II のコメンタリーも参照した。なお Herbert Kynaston, ed., *Theocritus* (Oxford: Clarendon Press, 1902) や Sir Kenneth Dover, ed., with introduction and commentary, *Theocritus, Selected Poems* (Bristol Classical Press, 2000) も参照した。

治した例として、一つ目の巨人ポリュフェーモス⁶を挙げる。ポリュフェーモスは海のニュンフであるガラティアに恋をして、身を焦がしていたのであったが、海に臨む岩の上に座して嘆きの歌をうたうことで、愛の女神キュプリスが彼の心（肝臓）につけた恋の傷を癒したのであった。牧歌の第 11 番は、このポリュフェーモスの嘆きの歌がその殆どを占めている。最初と最後における語り手のニーキアースへの語りかけは、いわば全体の枠構造を構成している。

さて第 11 歌の大半を占めるポリュフェーモスの歌を見てゆくと、まず彼は以下のように、ガラティアに対する思いを吐露することから始める。

ῥω λευκὰ Γαλάτεια, τί τὸν φιλέοντ' ἀποβάλλῃ,
 λευκοτέρα πακτᾶς ποτιδεῖν, ἀπαλωτέρα ἄρνός,
 μόσχῳ γαυροτέρα, φιαρωτέρα ὄμφακος ὠμᾶς;
 φοιτῆς δ' αὖθ' οὕτως ὄκκα γλυκὺς ὕπνος ἔχῃ με,
 οἶχῃ δ' εὐθὺς ἰοῖο' ὄκκα γλυκὺς ὕπνος ἀνῇ με,
 φεύγεις δ' ὥπερ οἷς πολλὸν λύκον ἀθρήσασα; XI, 19-24 (下線は筆者)

(ああ、白く輝くガラティアよ、なぜ愛する者を拒絶するのか？ 見るにクリーム・チーズよりも白く、子羊よりも柔らかで、子牛よりも元気で、熟していない葡萄よりも滑らかなお前。お前はどのように、甘い眠りが私を捉える時にやって来てまた甘い眠りが私を放つ時に、直に去ってゆくのか、丁度、灰色の狼を見た羊のようにお前は逃げるのか？)

彼はこのようにガラティアを讃えることから始める。(詩の形式は叙事詩と同じ長短短調六歩格 dactylicus hexametrus が使われている。) 彼はまずガラティ

6 テオクリトスの原文ではポリュフェーモスはドーリス方言で Πολύφαμος ポリュファーモス (1.8) と表記されているが、ここでは通例に従いポリュフェーモスと表記した。

7 引用文に付した日本語訳は単に参考までのものである。なお訳するにあたり宮城徳也氏の翻訳を部分的に利用させていただいた。「牧人の恋の嘆き——“恋の薬は歌のみ”をめぐって——」『ほらいずん』(第 21 号、1989 年)。記して感謝したい。

アの素晴らしさを4つの形容詞の比較級——上の引用の下線の単語——を用いて賞賛している。そして次に自分の恋心に少しも応えてはくれない様を、狼から逃げる羊に譬えて嘆いている。

このような賞賛と嘆きによってポリュフェーモスは歌い始める。ガラテΙΑとの出会い——それは彼に髭が生え始めた時、ヒアシンスを摘みたいとやって来たガラテΙΑを彼が道案内した時であったが——その出会いに続いて、彼は自分がガラテΙΑに相手にされない理由を語る。ここで注意したいことは、彼は自分の容貌がそれほど魅力的ではないことを自覚していることである。キュクロプスであるポリュフェーモスは、当然ながら眼は一つであり毛深い眉が一本、その眼の上にあるだけである。このような容姿を彼は認めている。テオクリトスが描くポリュフェーモスはこのように大変自意識的な人物である。そして彼は自分の欠点を意識していると同時に彼は自分の利点をも意識している。その利点とは、彼には千匹の羊がいること、いつでもミルクを搾って飲めることなどである。また音楽の才能に恵まれていることも意識している。そして、このような道具立て・利点によってガラテΙΑをなんとか、海から陸へと誘おうとする。

ἀλλ' ἀφίκευσο ποθ' ἄμέ, καὶ ἐξεῖς οὐδὲν ἔλασσον,
τὰν γλαυκὰν δὲ θάλασσαν ἔα ποτὶ χέρσον ὀρεχθεῖν·

ἄδιον ἐν τῶντῳ παρ' ἐμὶν τὰν νύκτα διαξεῖς. XI, 42-44 (下線は筆者)

(いや、私のところへ来ておくれ、それでお前は悪くなることは絶対ないだろう、海が陸地に向かって寄せるがままにしておくがいいさ。より心地よく洞窟の中で私の傍で夜をお前は過ごすだろう。)

彼は自分の洞窟の心地よさに言及するが、これが「心地よい場所」(locus amoenus) というトポスであることは言うまでもないだろう。このような独白からポリュフェーモスがガラテΙΑに対する恋心に身を焦がしていることは明らかである。しかし彼の恋は一方的なもので、ガラテΙΑは決してポリュフェー

モスの恋心に応えようとはしていない。上の引用において特に動詞に注目したい。ガラテΙΑを誘う動詞には命令形が使われている部分があることは確かである。海から上がってくるように促す動詞 ἀφίκευσο は命令形であり、また打ち寄せる波をそのままにしておくように言う言葉 ἔα もまた命令形である。しかしこれらの動詞は強い命令の意味をもっているようには思われない。引用の1行目の後半部では、καὶ ἐξεῖς οὐδὲν ἔλασσον（お前は悪くなることは絶対にはないだろう）という。ここで動詞 ἐξεῖς は直説法未来である。しかしこれは単純な未来の予測をしているのではないだろう。もしも自分のところに来てくれれば絶対に悪い結果にはしない、という意思の婉曲な表現と理解する方がよいであろう。同じことは引用の最後の行についてもいえよう。ここでも動詞 διαξεῖς は直説法未来であるが、単に「お前はより心地よく洞窟の中で私の傍らで夜を過ごすだろう」と予測しているのでは決してない。むしろ「私と一緒に心地よく、夜を過ごしなさい」という穏やかな命令形と理解するのが適切であろう。そのような希望を未来形に託して表現していると考えられるのである。そしてこのことは、言い換えれば、ポリュフェーモスは、そのような控えめなやり方でしか、自分の希望を表明することが出来ないと考えられるのである。決して威圧的に命令口調でガラテΙΑを誘っているのではないことは記憶されるべきであろう。

ポリュフェーモスは、引き続いて、自分の欠点を痛切に自覚した上での、時に極めて自虐的な言葉を喋る。いわく「私の命もお前のために焼いてしまおう。それどころか、何より大切な私の一つ眼さえも。」(52-53行) このように、自分の醜い容姿を嘆くのであるが、このような嘆きは彼が醜悪であるが故に余計に感動を呼ばないだろうか。彼は続いて、自らガラテΙΑに会うために海に行きたいという願望を述べ(54-62行)、——しかし彼には鰓がなく、海に行けないことは彼にとってこの恋が成立不可能であることの証ともなっていよう——その後で、再びガラテΙΑに海から上がってくるように、誘いかける。

ἐξένθοις, Γαλάτεια, καὶ ἐξενθοῖσα λάθοιο,
 ὥσπερ ἐγὼ νῦν ὧδε καθήμενος, οὔκαδ' ἀπενθεῖν·
 ποιμαίνειν δ' ἐθέλοις σὺν ἐμῖν ἅμα καὶ γάλ' ἀμέλγειν
 καὶ τυρόν πᾶσαι τάμισον δριμεῖαν ἐνεῖσα. XI, 63-66 (下線は筆者)

(出てきて欲しい、ガラティアよ、そして出てきて忘れて欲しい、私が今、このように座っているように、家へ帰ることなどは。私と一緒に、共に羊の世話をすることが気に入って欲しい、また乳を搾ることも、また、ピリッとする凝乳酵素を入れてチーズを固くすること。)

牧人の生活の楽しみを述べ、それがガラティアに気に入ることを望んでいる。またここでも用いられている3つの動詞に注目しなければならない。ここに至って命令形は一つも使われてはいないことを見落としてはならないだろう。まずポリュフェーモスは再びガラティアに海から出てきて欲しいというのだが、それは動詞の命令形によって表現されてはいない。動詞(ἐξένθοις)には命令法ではなく希求法(optative)が用いられている。また他の動詞、λάθοιοやἐθέλοιςについても同様である。ポリュフェーモスはガラティアに、海から出てきて欲しいと願い、また共に羊の世話をすることが気に入って欲しいと望むのである。ここで動詞が希求法であることは、ポリュフェーモスのガラティアへの態度を反映したものとなっているといえるだろう。ガラティアに恋こがれる心情が希求法となって表されているといえるだろう。

ポリュフェーモスのこのような言葉遣いに窺われるように、両者の関係についてみれば、ポリュフェーモスが一方的にガラティアを愛し、彼女は少しもそれに応えないという状況にあることは明らかである。そのような様子が以上の引用から、実によく理解できるであろう。纏めていえば、次のようになるであろう。要するにポリュフェーモスは報われぬ恋に身を焦がしている男である。二人の関係は決して対等な関係ではない。彼はガラティアに対して弱い存在であり、この恋において決してイニシアティヴを握ることなど出来ない存在であると言えよう。要するにポリュフェーモスにとってガラティアは、高根の花であり、手の届かぬ存在である。テオクリトスの描くポリュフェーモスはこのよ

うな存在であることをまず確認しておきたい。

2 テオクリトス継承とオウィディウスの技巧

ではオウィディウスの描くポリュフェーモスはどうなっているだろうか。ガラテアとポリュフェーモスの話については、テオクリトス以前には別の話も伝わっている。例えばギリシアの詩人バキュリデース (Bacchylides, c. 505-450 BC) は、ポリュフェーモスがガラテアを愛し、そしてガラートゥス (Galatus) という名前の息子をもうけたことを歌ったとされている⁸。しかし、オウィディウスが『変身物語』第13巻を書く際に参照したのはこのような話ではなかった。オウィディウスが主に利用したものは、ホメーロスの『オデュッセイア』の他にはテオクリトスとウェルギリウスであった⁹。オウィディウスが描くポリュフェーモスは基本的には、テオクリトスの描くような一つ目の怪物のような存在といってよいだろう。『オデュッセイア』において描かれているような、凶暴なキュクロプスである。

『変身物語』第13歌においては、ポリュフェームス (Polyphemos) とガラテア (Galatea) の物語は750行から897行まで148行からなっている。その全てがガラテア自身の一人語りという形式で語られている。まず、スキュッラ Scylla に促がされて彼女は、アーキス (Acis) との悲恋物語を語るのである。つまり彼女の愛したアーキスは、ガラテアを愛するポリュフェームスの怒り

8 David A. Campbell, ed., *Greek Lyric IV* (Loeb Classical Library, 1992), p. 304. なおポンペイに残された壁画には、二人が結ばれたという異説に基づいて、ガラテアを抱擁するポリュフェーモスを描いているものがある。諸川春樹監修『カラー版西洋絵画の主題物語 II 神話編』(美術出版社、1997年)、105頁参照。

9 Neil Hopkinson, ed., *Ovid, Metamorphoses Book XIII* (Cambridge University Press, 2000) や Sara Mack, “Acis and Galatea or Metamorphosis of Tradition” *Arion*, 3rd series, 6, 1999, pp. 51-67 など参照。なおテオクリトスの牧歌6番におけるポリュフェーモス像はまた少し11番とは違うが、この点については立ち入らない。

にふれて殺されてしまう、その話を語るのである。彼女はまず、自分が愛したアーキスがファウヌスとニンフのシュマエティス Symaethis の子供であることから説明を始める。彼が 16 歳になり、柔らかな頬に産毛が生える頃に、彼に恋をした、と語る（テオクリトスにおいては、ポリュフェームス自身に産毛が生える頃にガラテアに恋をするのだが）。そしてアーキスを愛するガラテアをキュクロプスのポリュフェームスが愛し恋の 3 角関係が生じる。ガラテアに恋をするポリュフェームスは以下のように描かれている。

nempe ille immitis et ipsis
horrendus siluis et uisus ab hospite nullo
impune et magni cum dis contemptor Olympi
quid sit amor sensit ualidaque cupidine captus
uritur, oblitus pecorum antrorumque suorum.¹⁰ 759-763

（実に荒くれの彼自身が、森自体から恐れられており、どの旅人からも、危害を受けないではないと思われており、大いなるオリュンポスと神々を軽蔑するものだが愛がどのようなものであるか、強い欲望に囚われた彼は知り、彼の羊の群れも洞窟のことも忘れて、恋に燃えたのだ。）

オウィディウスにおいてまず強調されるのは、ポリュフェームスが荒くれ者であることである。彼は森からも恐れられており、凶暴で神々を敬わない者である。しかし、その彼が一旦恋に捉えられると、家畜の世話を忘れてしまう。そして彼は身だしなみにも気を配るようになるのであるが、それは恋する者として人間同様でキュクロプスとて例外ではないようだ。その様は以下のように描かれている。

iamque tibi formae, iamque est tibi cura placendi,

10 R.J. Tarrant, ed., *P. Ovidi Nasonis Metamorphoses* (Oxford: Clarendon Press, 2004), p. 401. 以下オウィディウスからの引用はこの OCT 版に拠る。

iam rigidos pectis rastris, Polypheme, capillos,
 iam libet hirsutam tibi falce recidere barbam
 et spectare feros in aqua et componere uultus;
 caedis amor feritasque sitisque immensa cruoris
 cessant, et tutae ueniunt abeuntque carinae. 764-769 (下線は筆者)

(今やお前は容姿への〔配慮を持ち〕、また喜ばせたいという気持ちになり、今やお前は、ポリュフェームスよ、ごわごわした髪の毛を鋤で梳かし、今や伸び放題の髭を鎌で刈り取ることが気に入り、そして獐猛な顔を水に映し表情をつくることに気に入る。殺戮の欲求と、凶暴さと血を流すことへの果てし無い渴望は止み、そして安全に船は往来する。)

この部分はポリュフェームスが恋に捉えられ、そのために身だしなみに気を配るようになり、そして生来の凶暴さもなりを潜めたさまを描いている。そして船も彼に危害を加えられることなく通行できるようになったとオウィディウスは書いている。

そして、テオクリトス同様に、ポリュフェーモスは恋心を以下のように吐露する。

“Candidior folio niuei Galatea, ligustri,
floridior pratis, longa procerior alno,
splendidior uitro, tenero lasciuior haedo,
leuior adsiduo detritis aequore conchis,
 solibus hibernis, aestiua gratior umbra,
nobilior palma, platano conspexior alta,
lucidior glacie, matura dulcior uua,
mollior et cygni plumis et lacte coacto,
 et, si non fugias, riguo formosior horto; 789-797 (下線は筆者)

(白い西洋イボタノキの葉よりも、ガラテアよ、お前はより白く、牧場よりも華やかで、高いハンノキよりもすらりとしており、ガラスよりも輝いて、幼い仔山羊よりも陽気で、不断の水に洗われた貝殻よりも滑らかで、冬の太陽よりも、夏の日蔭よりも心地がよく、果物よりも見事で、高いブラタナスよりも人目をひく、氷よりも明るく、熟した葡萄よりも甘い、白鳥の羽よりも、また凝固したミルクよりも

柔らかい、そして、もしもお前が逃げなければ、水がよく撒かれた庭よりも美しい。)

テオクリトスにおいてポリュフェーモスは4つの形容詞（の比較級）を用いて、ガラテアを褒め称えていた。しかし、オウィディウスにおいてはこの部分は拡大されて、13の形容詞の比較級が用いられている。ガラテアの魅力はこのような形容詞の多用によって、テオクリトス以上に強調されており、読者は、オウィディウスがポリュフェーモスを真摯な恋に悩むものとしていると一応は考えるであろう。

しかし、形容詞の過多は語る内容を強調するというよりも、むしろその内容に疑念を持たせるという場合もありえるだろう。ガラテアの場合はそれに該当するのではないだろうか。というのも、詩人はすぐ引き続いて、ポリュフェーモスにガラテアの別の一面を想起させているからである。テオクリトスにおいてはガラテアの好ましからざる一面は軽く触れられているだけであった。ところが、オウィディウスにおいてはそうではない。ポリュフェーモスは以下のように、ガラテアのマイナス面をも長々と語っている。

saeuior indomitis eadem Galatea iuuenis,
durior annosa quercu, fallacior undis,
lentior et salicis uirgis et uitibus albis,
his immobilior scopulis, uiolentior amne,
laudato pauone superbior, acrior igne,
asperior tribulis, feta truculentior ursae,
surdior aequoribus, calcato immitior hydro,
et, quod praecipue uellem tibi demere possem,
non tantum ceruo claris latratibus acto,
uerum etiam uentis uolucrique fugacior aura. 798-807（下線は筆者）

（その同じガラテアがくびきを掛けられたことのない牛よりも荒々しく、年を経た樫の木よりも固く、波よりも安心できない、柳の枝や白い実をつける葡萄の木よりもしたたかで、そこの岩よりも不動で、小川よりも激しく、誉められた孔雀よりも傲慢で、火よりも強烈で、アザミよりも棘があり、お産をした熊よりも凶暴だ、

海水よりも耳を貸さず、踏みつけられた蛇よりも残忍だ、そしてとりわけ、貴方から取り去りたいと、できれば願っていることは、鋭い吼え声に追い立てられた鹿よりも、いや本当に、風よりも疾風よりも、逃げ足が速いことだ。)

13 の比較級を用いてガラテアを賞賛したのと同様に、今度は 13 の比較級を用いて、ガラテアの別の、ポリュフェームスにとって好ましくない一面が明らかにされる。これを客観的な描写であると理解する必要はないかもしれない。これはあくまでもポリュフェームスから見ての、ガラテアの一面であると理解の方がよいかもしれない。つまりこれは、自分に色よい返事をしないガラテアの一面を、大仰な言葉使いによって嘆いている場面と理解することは出来るだろう。しかし作者のオウィディウスにとっては、それだけではないようにも思われる。

ガラテアの否定的な一面は 13 の形容詞によって描かれていた。この 13 という数字は、肯定的な面を語る形容詞とまったく同数である。このことの意味をどう考えたらよいだろうか。これは偶然の所産であるなどということは決して出来ないであろう。オウィディウスは到底そのような暢気な詩人ではありえない。ガラテアの素晴らしさを表す 13 の形容詞の比較級は、否定的な面を表す形容詞の比較級の、まったく同数のものによって、いわば否定されていると考えられるのではなからうか。そうでなければ、同数であることの意味は理解できない。語りの形式上では、この部分はガラテアがスキュッラに話している部分であり、そして、その話の中で、ガラテアは、ポリュフェームスが以上のような嘆きの言葉を吐露した、と報告している部分である。その意味では、単純にポリュフェームスが嘆きのあまりガラテアの疎ましい一面をも吐露した、と理解することが出来るだろう。そのような理解は常識的な理解のようにも思われる。が、それだけではないのではなからうか。つまり、ここではむしろ、ポリュフェームスの話を報告しているのは、ガラテアではなく、むしろ作者であるオウィディウス自身であるといえないだろうか。ここで詩人は完全無比な恋の対象としてのガラテアではなく、むしろ多少は意地悪い一

面を有する人物としてのガラテアを描いているのではあるまいか。そうであれば、プラス面を伝える 13 の形容詞と同数の形容詞を用いたことが説明できないのではないと思われる。要するにオウィディウスは密かに、ガラテアは完全無欠の恋の対象ではなく、負の側面をもつ恋人であることを明らかにしているのである。詩人のこのような一面は忘れてはならないように思われる（この点については後述する）。

オウィディウスの描くポリュフェームスは、一応はテオクリトスの伝統に沿っている。彼は、毛むくじゃらの、一つ目の凶暴な巨人である。それがひと時、ガラテアによって恋する巨人に変貌し、凶暴さを忘れている、そのような存在である。またガラテアは、完全無欠な恋人のように描かれてはいるが、しかし、欠点もまたほのかに感知されえるような存在である。そのような二人として描かれているといえよう。

一時的にではあれ、恋のために凶暴さをなくしたポリュフェームスは、更にガラテアに対して、もしも自分をよく知ってくれたならば、決して嫌いにはならないだろうと、次のように自信のほどを開陳する。

At bene si noris, pigeat fugisse, morasque
 ipsa tuas damnes et me retinere labores.
 sunt mihi, pars montis, uiuo pendentia saxo
 antra, quibus nec sol medio sentitur in aestu
 nec sentitur hiems. sunt poma grauantia ramos, ...808-812（下線は筆者）

（もしも「私を」よく知ったなら、逃げたことを残念に思うだろうし、またお前の逡巡をお前自身が責めるだろうし、また私を引きとめようと努めるだろう。私には山の一部分だが、天然の岩が天井をつくっている洞窟がある、そこでは太陽は真夏でも感じられないし、また冬も感じられない。果物がたわわに枝に実っている。）

ここでポリュフェームスは、テオクリトスの描くポリュフェームスと同様に、自分の長所を並べ立てガラテアの歡心を買おうとする。彼女を説得しようとして自分の心地よい場所 locus amoenus としての住居、つまり洞窟を持ち出す

が、これはテオクリトスと同様である。このように彼は自分の財産を示し、彼女を説得しようと試みる。そして彼は穏やかな態度をとっているといってもよいだろう。彼は *at bene si noris, pigeat fugisse*（もしも「私を」よく知ったなら、逃げたことを残念に思うだろう）と述べるが、その態度は決して傲慢とはいえない。また *damnes, labores* といった動詞も彼の同じような、傲慢とはややかけ離れた態度を暗示しているといえるだろう。

そして彼の切ない恋心を以下のように吐露し、海から陸に上がってくるように誘う。また、続けて、彼は自分がそれほど醜悪でもないと述べる。

iam modo caeruleo nitidum caput exsere ponto,
iam Galatea, ueni, nec munera despice nostra!
 certe ego me noui liquidaeque in imagine uidi
 nuper aquae, placuitque mihi mea forma uidenti.
aspice sim quantus! non est hoc corpore maior
 Iuppiter in caelo (nam uos narrare soletis
 nescioquem reganare Iouem); coma plurima *toruos*
 prominet *in uultu* umerosque ut lucus obumbrat.
 nec, mea quod rigidis horrent densissima saetis
 corpora, turpe puta; turpis sine frondibus arbor,
 turpis equus, nisi colla iubae flauentia uelent. 838-848 (下線は筆者)

(どうか、さあ、青い海から白い頭を上げて下さい、今はガラテアよ、出てきて下さい、私の贈り物を軽蔑しないで！ 確かに私は自分を知っているし、自分を少し前に水の表面で眺めたが、私の姿は見ている自分を喜ばせた、見てくれ、私がどれほど大きいかを。この体よりも天のユピテルも大きくはない、それを言うのはお前はいつもユピテルとかいう誰かは知らない人が支配しているといっているからだ。ふさふさした髪の毛が厳しい顔に垂れ下がっており、両肩を聖林のように、暗くしている。私の体を剛毛がおおっていることを、醜悪と思ってはいけな、木も葉っぱがなければ醜悪だし、馬も、もしもタテガミが栗毛色の首をおおっていなければ、醜悪だ。)

ここは基本的に、テオクリトスに倣い、ガラテアに海から上がって来て欲しいと願い、そして、自分の魅力をアピールしようとする部分である。彼は自分

の魅力を訴えているが、その中には図らずも、笑いを誘う所もある。彼はまず自分の体がユピテルよりも大きいと誇るが、これは無知というものだろう。またユピテルを *nescioquem ... Iouem* 「ユピテルとかいう誰かは知らない人」というが、これは彼の無知の極地といえるだろう。ここで読者が感じることは、ポリュフェームスの自信とは裏腹の無知ということであろう。そしてこのような語りをしているのは、いうまでもなく詩人のオウィディウスなのである。

そしてまた注目しなければならないことは、ポリュフェーモスが自分の顔を *toruos uultus* と述べているところである。彼の顔については、岩波文庫訳において中村善也氏は「威厳のあるこの顔」¹¹ と訳しているが、この形容詞 *toruus* については注意が必要である。ポリュフェーモスが自分の顔を形容している、という点を考慮すれば、*toruus* という形容詞を「威厳のある」とか「厳しい」というように積極的に解釈することも可能であろう¹²。しかし、次のような事実も忘れてはならないと思われる。それは、オウィディウスはこの形容詞をウェルギリウスから借用しているということである¹³。ウェルギリウスの『アエネーイス』第3巻において、アエネーアース一行は現在のメッシーナ海峡付近を航行する。そしてスキュラ (Scylla) とカリュブディス (Charybdis) の難所を何とか逃れてシキリアに辿り着く。そこでオデュッセウスの従者であったアカエメニデス (Acaemenides) という男と邂逅する。彼はオデュッセウスの部下であり、共にシキリアに流れ着いたのであり、そしてオデュッセウスがポリュフェーモスの広い洞窟から脱出した時に取り残された男であった。アエネーアース達は彼からオデュッセウスがポリュフェーモスの眼を潰し洞窟から脱出する様を

11 中村善也訳『変身物語』（岩波文庫）、下巻、239頁。

12 *toruus* に関して Charlton T. Lewis & Charles Short, ed., *A Latin Dictionary* (OUP) は語源に言及した後、wild, fierce, grim, gloomy, savage という意味を記している。

13 Neil Hopkinson, 225.

聞く。『アエネーイス』においては、一つ眼を潰す件は次のように語られる。

... telo lumen terebramus acuto

ingens quod torua solum sub fronte latebat,¹⁴ 3.635-6 (下線は筆者)

(鋭い武器で大きな眼を我々は刺し貫く、その眼は唯一つで凶暴な額の奥に隠れていた。)

オウィディウスがウェルギリウスを借用している、つまりウェルギリウスの延長線上にあることを斟酌すれば、やはりポリュフェームスの顔は「凶暴」であるといわざるを得ないのである。彼は恋に身を焦がし、柔軟な態度をとるようになってきたとはいえ、やはりその凶暴性をまったく無くしてはいないのである。少なくとも、オウィディウス自身はそのようにポリュフェームスを造形しているといえるだろう。要するに、オウィディウスの、表面上ポリュフェームスを賞賛するような姿勢の下には、やや風刺的な態度が潜んでいる、といってもよいだろう。既に述べたことだが、ポリュフェームスは 13 の形容詞を用いてガラテアを賞賛したが、同時に、(テオクリトスとは相違して)、全く同数の形容詞を用いてガラテアの好ましからざる一面を明らかにした。オウィディウスは、決して語りに没入してはいない。彼は時には語りを楽しみつつ、語りの対象から距離を置いているといえるだろう。そして時には判りにくいやり方で、風刺的な態度を潜ませてもいるのである。彼がこのような技巧を用いる詩人であることは記憶しておきたい。

ポリュフェームスは、最後にガラテアに次のように嘆願する。

adde, quod in uestro genitor meus aequore regnat;

hunc tibi do socerum. tantum miserere precesque

supplicis exaudi! tibi enim succumbimus uni,

14 R.A.B Mynors, ed., *P. Vergili Maronis Opera* (Oxford Clarendon Press, 1969), p. 173.

quique Iouem et caelum sperno et penetrabile fulmen,

Nerei, te ueneror; tua fulmine saeuior ira est. 854-858 (下線は筆者)

(更に付け加えて下さい、お前の海を私の父が支配していることを。彼を私はお前の舅にしよう。どうぞ哀れんで下さい、そして嘆願者の願いを聞いて下さい！ 私はお前にだけ膝まずきます、ユピテルも天も、刺し貫く雷電も軽蔑している私がそうするのです。ネーレイスよ、貴方を私は畏敬している、貴方の怒りは雷電よりも残忍なのだから。)

彼は自分が海の神ネプトゥーヌスの息子であることを持ち出す。二人が結婚すれば、その偉大な海の神ネプトゥーヌスを(義理の)父とすることができるのだ、と自慢する。しかしここで、彼の嘆きは、自分を哀れんでください、という調子で終わるのである。そしてガラテアだけに屈するというのだ。ユピテルにも屈しない自分がガラテアには膝を折ることを表明している。

ポリュフェームスの嘆きは、このような調子で終わっている。彼はガラテアに対して、自分の恋心に応えてくれるように嘆願している。彼の方に顔を向けて、好意を示してくれるように、という願いを表明している。彼はガラテアに対して、恋する者という弱い立場にあることは明らかである。ガラテアは少しもポリュフェームスの恋心に応えようとはせず、ポリュフェームスの恋はガラテアに対する一方的な恋に終わっている。オウィディウス自身の語りのスタイルは、時にはポリュフェームスの恋の顛末を語ることに集中するというよりも、語り自体を楽しむことを優先しているようであり、また時には風刺的な姿勢を潜ませているようでもあった。そのためポリュフェームス像にはテオクリトスが持っていたような、一途な恋に身を焦がす、といった切迫感が欠けているように思われる。しかしながら、そのような細部の差異にも拘わらず、オウィディウスのポリュフェームス像は、彼が手本としたテオクリトスのポリュフェームス像と基本的には同じものであるといえるだろう。この点を確認することは、ポーブの英訳を考察する時に、極めて重要である。

3 ポープのポリュフェーマス

Twickenham 版ポープ詩集の编者である E. Audra と Aubrey Williams が注において示しているように、ポープがオウィディウスから「ポリュフェーマスとエイシス」Polyphemus and Acis を英訳するにあたって、先行する英訳を参照したことは明らかである¹⁵。1567 年のアーサー・ゴールディング (Arthur Golding, c.1536–c.1605) に拠る、オウィディウスの『変身物語』の英訳は英訳史上最初期のものであり、シェイクスピアによって愛好された翻訳であった¹⁶。以後の翻訳として、ジョージ・サンズ (George Sandys, 1578–1644) に拠るもの (1626) や、ジョン・ドライデン (John Dryden, 1631–1700) に拠るものなどがある。ポープの英訳とこれらの翻訳との影響関係の問題はこれ自体重要な研究課題となると思われるが、ここでは (必要のある場合を除いて) その問題には立ち入ることはしない。まず基本的な問題として、ポープはどのように翻訳しているかということに焦点を絞り、とりわけポリュフェーマス像を中心に考察することとしたい。

ポリュフェーマスが恋に落ちて、そして身だしなみに気を配るようになるところはポープでは以下のように訳されている。

While nice, and anxious in his new disease,
 He vainly studies every art to please:
 To trim his beard, th'unweildy scythe prepares;
 And combs with rakes, his rough, disorder'd hairs:
 Adjusts his shapes; while in the crystal brook

15 Twickenham 版は脚注において、Dryden 訳や George Sandys 訳を示し、ポープ訳との比較を容易にしている。

16 Jonathan Bate, 'Shakespeare's Ovid', in John Frederick Nims, ed., *Ovid's Metamorphoses*, 'the Arthur Golding Translation 1567' (Philadelphia: Paul Dry Books, 2000), p. xli.

He views and practices a milder look.

Love makes him all his cruelty forego,

And ships, in safety, wander to and fro.¹⁷ 21-28 (下線は筆者)

この部分は 27 頁から 28 頁において引用した原文の 764 行から 769 行に対応する部分である。ポープの意図が原文逐語訳にないことは明らかである。(彼は英雄二行連句 heroic couplet を使っており、それはドライデンに影響されてのことと考えられるが、その問題には触れない。) テオクリトスにおいて恋は病とされ、その治療薬は詩歌のみとされていた。ポープの描くポリュフェーマスも恋という病 (disease) に罹る。そして、ガラティアを喜ばせようと「あらゆる技術」を考究するのである。ポリュフェーマスが行う行為の実態はオウィディウスの描く行為と同じではあろうが、それを表現する言葉は「技術」といい「考究」といい、表現が彫琢されている印象を与えるように思われる。このような語りの特徴は髭を刈り込むために大鎌を準備する場面に明らかに窺われる。ポリュフェーマスが用意する大鎌は th'unweildy [*sic*] scythe とされるが、原文にはない形容詞が付加され、大鎌が「取り扱い難しい」ものであることを明らかにしている。この付加には、取り扱い難しい大鎌を「取り扱い難しい」と認識し、そしてそのように書き記す詩人の意識が反映していることはいうまでもないであろう。このような意識と描写の方法は、ポリュフェーマスが恋のために残忍さを棄てる場面からも知られる。原文においては caedis amor feritasque sitisque immensa cruoris cessant, ll. 768-9 (殺戮の欲求と、凶暴さと血を流すことへの果てし無い渴望は止み) という部分であるが、この部分はポープでは Love makes him all his cruelty forego. l. 27 (愛が彼に全ての残忍さを放棄させる) と訳されている。原文における「殺戮」「凶暴さ」「血を流すこと」という血なまぐさい一面は描かれず、単に「愛」の持つ肯定的な側面が強調されるの

17 E. Audra and Aubrey Williams, ed., *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*, Vol. 1 (London: Methuen, 1961), p. 366. 以下、ポープからの引用はこの版に拠る。

である。叙述におけるこのような方向性の相違は、オウィディウスとポープの大きな差異をなしているのである。この点は記憶すべきことと思われる。

以上の部分において、オウィディウスは血なまぐさを排し、愛の作用を肯定するような表現を採用していた。同じような叙述の傾向は以下の部分においても認められる。原文においてガラテアは 13 の形容詞により称揚され、また同数の形容詞により（たとえ軽微ではあれ）非難されていた。その部分はポープでは以下のように描かれる。

Oh! lovely nymph, and more than lilies fair, }
 More sweet than winter's sun, or summer's air, }
 And smooth as shells that gliding waters wear; }
 Not ice or crystal equal splendor yield,
 O far more pleasing than the flow'ry field!
 Wanton as kids; and more delicious far,
 Than grapes mature, or blushing apples are;
 More strait than alders, taller than the planes;
 And soft as down upon the breast of swans:
 As gardens fresh, where running rivers stray,
 But, ah! like rivers, swift to glide away;
 And what alone must all my hopes remove,
 Swift as the wind before pursuing love; 53-65

13 の形容詞の順番が原文通りの配列になっていないことは、軽微な差異ということが出来よう。しかし、ここには原文との大きな差異が存在する。原文においては 13 の肯定的な形容詞はその後続く、否定的側面を表す同数の形容詞によってバランスがとられていた。しかしポープにおいては、上の引用が全てである。つまり否定的な側面を伝える部分は（最後の、逃げ足が速い、という一点を除いて）まったく捨て去られているのである。13 の比較級によって示された、ガラテアの好ましからざる一面は無視され、逆に 13 の比較級によってガラテアの好き面ばかりが強調される。

このような取捨選択によって、ガラティアは恋人らしい恋人になっているといえるだろう。また言い換えれば、ポーブはガラティアを、このように好ましい存在として描くことをよしとした、ということである。このことは注意されねばならない。そして、ガラティアは変質したといえようが、また同時にポリュフェームス自身も変質を被っているように見える。次のような彼の語りは、その変質を物語っているだろう。

Yet know, coy maid, and curse your long delay,
Know from whose arms you fly so fast away.
Behold the rocky caverns where I dwell,
Which summer suns, and winter frosts expel.
See how my fruits the loaded branches bend, . . . 66-70 (下線は筆者)

この部分は、原典においてポリュフェームスがガラテアに対して、逃げないでおくれと嘆願する場面に対応している。原典とポーブとの大きな違いは、その語りの雰囲気の違いである。原典においても命令形の動詞が使われていた。しかし、ポーブの場合ほどには命令的なニュアンスはなかった。ポリュフェームスはひたすら仰ぎ見るガラテアにたいして懇願をしているのであった。その点でポリュフェームスは弱い存在であった。しかし、ポーブの場合には、二人の間の力関係は、そのようなものではない。基本的には、ポリュフェームスがガラテアを説得しているという事情に違いはない。しかし、その誘い方や口調には大きな違いが認められるだろう。彼は、ガラティアに対して、「知らない、内気な乙女よ、そして貴方の遅延を呪いなさい」という。そして続けて「誰の腕から貴方は逃れているのか知らない」という。そして「私が住んでいる岩の洞窟を見なさい」といい、そして「いかに実った果物で枝がたわんでいるか見なさい」と畳み掛ける。彼は如何に自分が財産もちであるかを意識し、それを恋人に印象づけようとしている。行為としては原典と同じだが、しかし、ここには原典がもつ、つれない恋人に懇願するような姿勢はないといえ

よう。彼はすでに自信に溢れる若者に変身しているように思われる。彼は思慕する相手の好意を得ようと懇願しているのではなく、むしろ内気な恋人を説得しているような雰囲気を感じられる。二人の関係は原典のような、ポリュフェーモスが一方的に恋焦がれているような関係ではなくなっているように感じられる。ポーブ訳ではそのように二人の関係は変わってきているといえよう。その点が最大の相違点であろう。

ポリュフェーモスは原典において、毛むくじゃらの巨人で粗野であり無知であった。そして恋を知る以前の彼は血なまぐさい殺戮を喜ぶような存在であった。そのような残忍な側面はポーブ訳では軽視されている。ポーブの描くポリュフェーモスは、寧ろ雄弁であり、明瞭であり、時には居丈高な恋人である。このような変身を遂げているということが出来るであろう。そしてこのような語りの調子は最後まで変わることはない¹⁸。

このような相違点をよく窺えるのが次の場面であろう。この部分はポリュフェーマスが優しく海から上がってくるようにガラティアを誘う箇所である。テオクリトスにおいては、ポリュフェーモスの思いは、動詞が希求法をとっていることに顕著に窺われた。希求法であるが故に、ポリュフェーモスの恋心の切ない胸のうちが一層痛切に感じられるところであった。そしてその点はオウィディウスにも引き継がれていた。しかし、ポーブにおいてはそうではない。

Come Galatea, from the sea arise,
And see my presents, nor the gifts despise.
I'm not so monst'rous; I my face did view

18 例えば次の3行のような雄弁な台詞においても、変わらぬ態度を窺うことができる。

So great the tale, I scarce can count them o'er;
The poorest shepherd best may tell his store.
Believe not me, but come and witness here, . . . 80-82 (下線は筆者)

In yon clear lake, and thought it handsome too:
 How great I look'd! of what a godlike size!
 Not Jove himself (your Jove that sways the skies)
 Is half so mighty, half so large, my love;
Your beauty charms a greater man than Jove.
 Hairs, like a wood, my head and shoulders grace,
 And cast a majesty on all my face:
 The comely steeds are grac'd with flowing manes;
 With fleeces sheep, and birds with plummy trains;
 Leaves deck the stately trees; and man is fair,
By bearded cheeks, and members rough with hair. 94-107 (下線は筆者)

ポリュフェーマスはガラティアに、「おいで」 come、「(海から) 上がっておいで」 arise、また「(贈り物を) 見てくれ」 see、「蔑まないで」 nor despise と語りかけるが、ここには原文のもつ嘆願するような調子は感じられない。彼が水に映した自分の顔は handsome だという。彼の顔は、サミュエル・ジョンソンの定義を用いれば、‘beautiful with dignity’¹⁹ ということになるだろう。要するに自分の顔は「威厳をもった美しい」顔だと豪語しているのである。そして自分はユピテルよりも大きく力強いと自慢するのだが、そこには原文のもっていたような、図らずも自らの無知を晒すような調子は見られない。「お前の美がユピテルよりも偉大な者を魅了しているのだ」という台詞に見られるように、寧ろ直接的で雄弁な論調がそれに代わっている。原文の「ごわごわした髪の毛」は単に Hairs に代わり、そしてそれは彼の頭や肩を美しく飾る grace といい、顔に堂々たる威厳 a majesty を投げかけると述べる。最後には髭の生えた頬と毛に覆われた手足を称揚する。このように描かれるポリュフェーマスは、オウィディウスにおいて描かれたような毛むくじゃらの粗野で無知で残忍

19 Samuel Johnson, *A Dictionary of the English Language*, 2 vols (London: 1756)
 ‘handsome’ 参照。

なキュクロプスではもはやないといえるだろう。言動においても外見においても、「洗練」という方向に向かって一步も二歩も踏み出している若者といえるだろう。このようなポーブの言葉遣いから、殆ど 18 世紀に生きている若者を連想したとしても、それはあながち間違いとはいえないであろう。

英雄二行連句を駆使するポーブの語り口は、時に莊重であり簡潔である。そしてポーブの英訳においてポリュフェーモスの血なまぐさ、残忍さ、凶暴さ影を潜める。それに代わって前面に押し出されるのは、彼の雄弁さ、明瞭さ、また威厳という積極的な要素である。またガラティアもそのようなポリュフェーマスに対応するように変質し、二人の関係は決してテオクリトスやオウィディウスによって描かれたような関係ではなく、限りなく対等の関係に近づいている。このような特徴がポーブの英訳の中に認められるということが出来るであろう。

4 おわりに

以上において、ポーブの描くポリュフェーモス像を、テオクリトスまたオウィディウスの描くポリュフェーモス像と比較しつつ、考察してきた。原典では、ポリュフェーモスは恋に囚われた、粗野で無知な毛むくじゃらの、一つ眼の巨人であるに過ぎなかった。テオクリトスの描くポリュフェーモスは、ガラティアに片思いを寄せている、恋する男であり、その恋心をひたすらに吐露する男である。恋に囚われた弱い立場の男であり、膝を折っても彼女の歓心を買おうとする。オウィディウスの描くポリュフェーモスも基本的にはテオクリトスと変わるところはない。

ポーブの描くポリュフェーモスは、しかし、以上のような古典的なポリュフェーモスとは違っている。恋に身を焦がす点は同じであるが、だからといって女々しさはない。弱弱しさ・軟弱さとは無縁である。彼は言葉遣いにおいてもより雄弁で、より凛々しく公正で精悍な若者という印象を与える。この点に古典的

なポリュフェーモス像とは大きな相違点が認められる。彼は凛々しいともいえる若者に変身していた。

では、なぜポリュフェーモス像は変質したかという問題が次に究明されなければならない。それを探ることもまた重要なことであろう。この点に関して、Pope が残した牧歌に関する幾つかのエッセイが手がかりとなるように思われる。Pope は、十代の後半のころに『牧歌』*Pastorals* を書いたが、同じ時期に牧歌に関する論説 *A Discourse on Pastoral Poetry* も書いている。この中でテオクリトスに触れている所が注意を引くのである。テオクリトスの描く人物は abusive であり immodest であり、そして恐らくはあまりにも粗野に対する傾きがありすぎるとして、テオクリトスの牧歌を欠点のあるものとしているのである²⁰。また同時に simplicity と rusticity とを区別し、simple thoughts の表現は plain でなければならないが、clownish 粗野であってはならないとも述べているのである²¹。このような姿勢は Pope が *Guardian* 誌に寄せた論説においても伺うことができるように思われる²²。要するにポープは、牧歌の simplicity と rusticity とに言及し、前者を重視しつつも後者についてはこれを退ける姿勢を示している。このような考えが、ポリュフェーモスを変貌させた要因であったといえるのではないだろうか。

20 “In the manner he seems a little defective, for his swains are sometimes abusive and immodest and perhaps too much inclined to rusticity.” See E. Audra & Aubrey Williams, eds., *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope* (London: Methuen & Co., 1961), pp. 31–32.

21 E. Audra & Aubrey Williams, eds, *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*, Vol. 1 p. 32.

22 *The Guardian*, edited with an introduction and notes by John Calhoun Stephens (The University Press of Kentucky, 1982)、第 40 号参照。Pope は Ambrose Philips との牧歌論争において、*Guardian* 誌に論説を寄稿し、Pope 的な手の込んだ遣り方で Philips に反論したことが知られている。

本稿は京大英文学会年次大会（2005 年 11 月 12 日、於京大会館）における口頭発表草案に基づくものである。